



「巡礼記を書け」って？

経験者はだれもが感じるであろうが、入院生活の夜は実に長い。昼間は治療を受け、妻も毎日来てくれるのでそう退屈する時間もないが、夜の時間は長い。

勤めている時は夕食は八時前後、自由の身になってからは七時前後。それが入院中の夕食は六時。消灯は九時半。しかし昼間も寝たりしているのだから眠れない。だから多くの人はテレビを見ている。私はそれをやめて、巡礼で訪れる地に

関する本を読んだ。それに飽きると、用意しておいたはがきに親しい友へ巡礼や入院生活について書いた。巡礼も入院生活も自分を見詰めるチャンスである。

さて、その入院中に出した一枚のはがきが縁となって、今回、この巡礼記を書くことになった。

「つむじ風」でおなじみの橋詰主幹から巡礼記を書かないかと誘いがあった。返事は濁していたが、主幹は私同様、愛飲家である。お酒を飲んでのリップサービスかもしれないと思っていたが、出発の三日前「お願いしますよ」と確認の電話をいただいて身が引き締まる。聖地を訪ねるとはいえ、わずかに十日間のバス中心の巡礼もどきの旅、期待に込められるだろうか。しかし有り難い話である。

旅の記憶、喜びは時間とともにすぐ風化してしまう。新聞に掲載されなくても、きちんと巡礼記を書けば良いのだが、私のような意図者にはノルマがなければそれはできない。だが私の悪文を読まされる読者には迷惑な話である。お詫びに読者の方には抽選で巡礼の旅の土産をプレゼントしようと思いつき、ポルトガルワインの名産地ポルトに立ち寄った時にブドウ酒を買い求めたが、中継地フランクフルトの空港で割れてしまった。

初めから余談が長くなつたが、多分、横道にそれることの多い巡礼記になりそうである。

第一回の「ペースメーカーに感謝」はこのことで、一回目の原稿量が私の勘違いから倍も書いたので二回に分けることになり、結果として訳のわからない副題となつた。この先が思いやられる。

そして何よりもこんな機会を与えられるきっかけを作ったペースメーカーに感謝の気持ちでいっぱいである。

さて、人はなぜ巡礼の旅に出るのであるのか？

巡礼はキリスト教に限つたものではない。仏教にも、イスラム教にも巡礼がある。むしろ宗教的要素が強いのではないだろうか。



ポルトのワイン工場へガイド氏は快く帽子とマントを貸してくれたのでワインを購入したが、神は巡礼にふさわしくないと思われたのか、ワインは帰らぬものとなった。

※橋詰さんは80歳で日刊新周南を退任されたが現在もご健在である。